

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幢ヶ谷九〇四 電話(03)337714649 FAX(03)329915367
振替 〇〇一〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 中央労金本店 No 1154163

購読料 月額 600円 6ヵ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

「官」「民」分断

いまなぜ、どんな労働組合か

..... 2

再び、労働組合強化の戦略・戦術について..... 3

憲法改悪阻止にむけた

運動体としての発展を！ 9プラス25改憲阻止市民の会..... 5

「公」と「私」の教育 闘技場 はずこへ 六津 五郎..... 7

浮島丸事件 姜 必善..... 9

—日朝の「戦後」を考える—

労働運動センター..... 11

—「〇四年春闘交流会」のご案内—

障害者を中心に手作りフォーラムを開催 太田 耕造..... 11

—「障害者の就労・自立」を目指して—

読者からのおたより..... 14

旬刊 社会通信

NO. 891

二〇〇四年二月一日号

二〇〇四年二月一日発行
(毎月一日・二日・二日三回発行)

「官」「民」分断

いまなぜ、どんな労働組合か

二〇〇三年六月二七日、参議院本会議で解雇ルールの新設を含む「労働基準法改正」案が可決され成立しました。「有事法制」と、同時進行で審議されてきたこの法律は、世間の注目をあびることもなく、ひっそりと成立しました。

ある労働団体の幹部は「有事法制に目をとられていたため対応が遅れた」と、コメントしています。果たして目を奪われるほどに「有事法制」反対の運動が労働組合次元で展開されていたでしょうか？

政府（財界）は「不当解雇を規制するために」というイメージを作為的に作り出していますが、実質は「解雇自由」を目的とした使用者側の理不尽を、無条件に擁護するための改革です。

現在の労働者が置かれている状況は、官と民が完全に分離分断されています。とりわけ民間企業にあつては、本工と非常勤（パート）の境界線（下位平準化）が無くなり、民間労働者は常に雇用不安にさいなまれ、精神的に萎縮させられる職場で過酷な労働を強いられています。

一方で、そうした民間労働者の不平と不満のはけ口を、公務員労働者に向けさせることで責任転嫁と分離分断を目論む政府の策謀は、現在非常に有効に作用しています。

このような労働者の人権と人格を軽視し、雇用を破壊することによって、「使用者には忠実に」「労働者は生き残りを競い合う」状態に置かれ、互いを敵対視させる政府の手法は、八五年の「中曽根臨調」から始まったものです。当時、労働運動の中心を担っていた「総評」解体を目論み、中心的存在であった国労に対して、総権力体制で徹底した弾圧を仕掛けた攻撃は、対象にされた国労よりも労働運動総体に不安と恐怖感を植え付けました。

「次は自分の組織が自分の雇用が」「闘うと国労のようになる」という不安が蔓延し、「労使協調」の風潮が広がった結果、総評運動は一気に衰退し解体しました。さらに総評の後ろ盾を受けて野党第一党の立場にあつた「社会党」も崩壊させられたのです。

こうした権力による一連の攻撃に対して、労働側は総括（反省）することなく、今日の失業率五%台、失業者四百万人（潜在失業者一千万人）という不幸な状況を迎えています。現在の「会社あつての労働者」という考え方自身、労使対等の原則を根底から否定するものです。

空前の利益を上げているNTTでは、十七万人の職員を五万人に減らすという、空前の合理化が実施されました。このNTTに見られる扱いこそが、日本企業の常識であり、その常識を公務員労働者にも適用しようとするのが「公務員制度改革」です。

厚生労働省から「労政課」の部署は消失しました。弁護士試験からは「労働法」の分野が削除されました。国労裁判（国鉄闘争）の不当判決によって「労働委員会」無用論が現実になりました。

そうした状況下での「労働基準法」の改悪は、「労働組合法」の改悪を意味し、団結権や結社の自由をも制約するものであり、まさしく労働者にとつての「死刑宣告」なのです。目前に迫っている「公務員制度改革」「市町村合併」「郵政公社化↓民営化」「教育基本法改正」等々、私たちの将来を不幸に導く流れは、すさまじい勢いで迫っています。

今改めて、なぜ「労働組合」が存在し、私たちは「組合員」になっているのかを、自身自身の頭で考え、行動する時期にきています。
(大分・〇)

再び、労働組合強化の戦略・戦術について

ソーシャル・パートナーシップ

労働運動はなぜ「羊のように」飼いならされてしまったのであろうか。世界労働運動の分野ではヨーロッパで顕著な「ソーシャル・パートナーシップ」、総評の全面崩壊で、労資協調というより、労資は運命共同体とする連合に日本労働運動はなによえに乗っ取られてしまったのだろうか。

労働組合の「ブルジョア化」のもつとも大きな要因は市場の独占、独占資本の成立にある。労働組合の「ブルジョア化」を一はやく完成させたイギリスにあつては、植民地独占であつた。なぜ独占が労働組合、労働者を墮落させたのか。

独占は超過利潤、正常な、全世界で通常のものとなつている資本主義的利潤をこえた余分の利潤をもたらす。資本家は、自国の労働者を買収し、ある一国の労働者とその資本家とがほかの国ぐにに対抗して結ぶ同盟をつくりだすために、この超過利潤の一部分を投げ与えることができる。このわずかな施し物が労働者大臣、「労働者議員」、労働官僚やせまいつンフト的―日本では企業―組合に組織されてきた労働者や職員等に、どう配分されるかは第二義的な問題ではない。

イギリスは一八四八年から六八年にかけて世界市場を独占し、米独仏からはげしく挑戦された一九世紀後半、英の市場―植民地―独占は落ちたとはいえ、資本主義の独占資本主義への転化で独占的地位を維持しつづけ、イギリスにおいて数十年の間「ブルジョアの労働組合」が長く存在する条件をつくつた。

買収の手法

資本主義の独占資本主義への転化とともに、独占資本の支配する国ぐにでも、イギリスに比べればより小さな層ではあるが、「労働貴族」の層を買収した。こうして、「ブルジョアの労働者党」はすべての国にとつて不可避の時代となつた。レーニンの生きた時代と第二次世界大戦前の時代である。

労働運動を中心とする大衆闘争が巻き起こり、それを押さえるために口では革命をいふけれど、実際は独占の手足となる勢力が必要となつたのである。それが、いわゆる日和見主義である。

現在社会の経済的基盤は独占である。このうえに、いんぎんで、温順で、改良主義的で愛国主義的な職員や労働者のための経済的特権や施し物に対応する政治的特権や施し物を、最新の資本主義の政治的諸施設―テレビ、インターネット、新聞、雑誌、議会、各種会議―とりわけ中央政府から地方自治体にいたるまで網の目のように張りめぐらされたピンからキリまでの審議会、諮問委員会、さらには官僚機構、会社組織に似せてつくりあげられた天下り機構等々である。

労働組合は第二次世界大戦後の嵐の時代に組織化をすすめ、組織率はどの国でも五〇%をはるかにこえた―北欧諸国では今でも八〇%にちかい。第二次世界大戦後の戦後復興の進行とともに、労働組合はソーシャル・パートナーシップに歩みを進める。

現代労働組合の弱点

昨年六月段階の労働組合率が発表された。それによると、全雇用者（労働者）は五千三百七十三万人。労働組合員は一千五十三万一千人で組織率は一九・六%とある。組織率は一九七四年以来減りつづけるばかりか、組合員数も九年連続の減少である。

組合に組織された労働者はどんな「層」なのか。一千人以上の大企業労働者は九百四万人で、組織率は五一・九%なのに、日本経済を下で支える九十九人以下の中小零細企業労働者は二千五百九十二万。しかし、組織率はたったの一・二%、パート労働者は一千万人をはるかにこえるが組織率は三・〇%であるにすぎない。現代労働組合最大の特徴と弱点はここにある。

大企業労働組合は会社と一体となり、中小零細企業労働者を搾取・抑圧するとの構図である。一千万組合員は連合に六百八十万、全労連に九十万、全労協に十六万が組織されている。

連合は政府・権力者、財界からとっても大事にされている。そして、政策・制度実現のためにと政労、労資、政労資会談が定期的に開かれるまでになった。共産党系の全労連はといえば、「おれたちも連合と同じように大事にしてくれ」というばかりで、組合員から「連合と中味はいっしょ」との吐息がでている。

連合は日本最大の労組ナショナルセンターを強調する。組織労働者に占められる割合は六四・六%と五〇%をこえるが、全労働者に占める割合はたった一二・六%にすぎず、これでは連合が労働者を代表する組織とはとてもいえない。労働組合組織が直接に労働者の少数者しかふくんでいないということである。

資本主義社会で労働者のほとんどを組織に加入させうるなどおおよそ考えられないことである。問題は組織の成員数より、むしろその組織の政策の実現の客観的意義にある。大衆に資本主義からの大衆の解放に役立つものであるか、それとも、少数者の利益を代表し、この少数者と資本主義との和解を代表するものであるか、ということにある。

エンゲルスは、古い労働組合の「ブルジョアの労働者党」、特権的な少数者と、「下層の大衆」、真の多数者とを区別し、「ブルジョアのお上品さ」に感染していないこの大衆に呼びかけたレーニンもそうである。ここに今の労働組合強化の核心がある。（つづく）

憲法改悪阻止にむけた運動体としての発展を！

「9プラス25改憲阻止市民の会」は二月二十六日、世話人会を開き、総選挙闘争の経験を踏まえた今後の「会」の活動方向・課題や運営方針などを話し合い、次のような確認を行いました。なお、「会」の存続、専従者配置を含む事務所の維持などについては、一月一三日の世話人会を経て一月二十六日の全体会（総括会議）で確認されました。

求められる憲法改悪阻止・生活防衛の国民戦線

世話人会ではまず基本的な情勢認識として次のことを確認した。

「総選挙結果は反撃が容易ではないことを示していると同時に、さらに矛盾が深まり、攻撃が強くなることを予測させている。いよいよ自衛隊が侵略軍へと脱皮する。憲法の改悪が日程に上る。

生活破壊が急速に進む。憲法改悪阻止、国民生活防衛の広範な国民戦線が求められている。その意味では『9プラス25改憲阻止市民の会』の組織と運動は時宜を得たものであり、（兵庫一区の）総選挙結果は市民の共感を得ていることを示している。しかし真価が問われるのは今からである。

私たちの任務は「〇五年」に向けて、改憲阻止戦線をどう拡大するのか。そのための日常活動をどう強化するのかということであり、七月の参議院選挙を改憲阻止という大目標のなかでどう闘うのが当面する課題である。」

「会」は憲法改悪阻止に向けた運動体

その上で、あらためて「会」の性格をはっきりさせ、運動の課題を明確にしました。

「会」は〇五年改憲阻止に向けた運動体であり、最終的には、憲法改悪の国民投票に「対」する運動体へ発展させる。

- (1) 地域、職場、学園に、憲法改悪阻止をめざす組織（名称は問わない）作りを援助する。上下関係ではなく、その連合体としての役割をめざす。
- (2) 憲法闘争は、生活闘争であるという観点に立って、平和闘争、民主主義闘争、市民運動、住民運動、労働運動など、多くの運動と連携・交流し、その運動を後援する。混乱を持ち込まない限り、意見の違いは尊重する。
- (3) 全国組織、中央組織の結成に期待するが、「会」としても近畿、全国に呼びかける。学者・文化人、宗教家、市民運動・労働運動活動家など、「下から」の組織づくりを呼びかける。それぞれの会員が努力する。
- (4) 社民党、新社会党、市民派など、地方議員の結集の実現を追求する

会員方式（会費制）へ切り替え

また、「会」の運営要綱についても新たな方針を確認しました。

- (1) これまでの「呼びかけ人」方式から「会員」方式に切り替える。
- (2) 「ニュース」を月一回のペースで発行し、各地、各分野の運動の交流を軸におく。
- (3) 「会」の運営費は会費でまかなう。会費は年会費一〇〇〇円とする。

※「会」の趣旨に賛同いただける方は、新たに会費の納入をお願いします。

(4)月一回程度、会員間の交流を含めた「会」の全体会議を兼ねた学習会を開催する。

(5)世話人・事務局体制の確立。「会」の運営は、世話人会の合意で行う。

●世話人 佐治孝典(代表世話人)、赤松徳治、家正治、上野憲司、加納花枝、河村宗治郎、佐野修吉、柴田富士子、中田作成、永倉苑子、鍋島浩一、原和美、原義弘、飛田雄一、古谷仁、松枝佳宏、門永秀次(アイウ順)。

※このほか、今後、地域の会、団体の会等の代表にも加わってもらおう。

●事務局体制 事務局長Ⅱ松枝、事務局次長Ⅱ門永(専従)、古谷、原(義)、上野。

大衆運動を精一杯たたかおう

さらに当面する重大課題について大衆運動の組織化に全力を上げようと確認しました。

・イラク派兵、震災九周年、年金をはじめ予算に示される生活課題(年金・医療・健保など)、労働問題、民主主義(住基ネット、地方自治・住民自治)、教育基本法、憲法など山積する課題の中で、大衆運動の組織化に全力をあげる。

・「会」としても独自の活動、あるいは全県下統一行動を呼びかける。

・地域、各団体、グループの活動を後援する(交流、紹介)。

参院選でさらに護憲派結集をめざそう

さらに、参院選にどう取り組むのかについても話しあい、その方向性を確認しました。

(1)参議院選挙は護憲派結集をめざす。「統一候補」擁立に努力する。

(2)「会」は、直接的な選挙母体とはしない(「護憲派結集」を呼びかける団体としての役割を果たす)が、参院選を大衆運動として支える。

(3)比例区について

参院選は「確認団体制度」を採用しており、最低十人の候補者が必要となる。比例区は基本的には中央レベルでの「共闘体制」による「統一候補」に期待するしかないが、その努力は自らも積極的に行う。

①全国に対して護憲派結集の発信をする。

②その前段として、ただ兵庫だけでなく、「9プラス25」の趣旨に全国各地で呼応できる人を募る作業を始める。全国各地で「9プラス25」のような組織の組織化を追求する。

③供託金として最低三千三百万円が必要である(比例区(六〇〇万円)一人、選挙区(三〇〇万円)九人として)。そのため、「三千三百万円カンパ運動」を全国に呼びかける運動の準備を進める。

(4)選挙区について

①比例区選挙で(統一的な)確認団体ができない場合でも、「9プラス25」として別の選挙母体を作り、兵庫選挙区単独でも候補者を擁立して闘う。

②比例区選挙をたたかえる場合、その確認団体の一人として兵庫選挙区に候補者を擁立して闘う。

(9プラス25改憲阻止市民の会)

「公」と「私」の教育 闘技場 はずこへ

「私学」と「国民学校」

江戸時代やそれ以前にも、学問所、藩校、寺子屋、道場、塾などと呼ばれる教育機関はあった。だがそれらは、今日のいわゆる学校とは、設立主体や目的からして異なるものであった。なぜなら、後者（学校）は「フランス革命以来、地上に初めて登場するようになった近代ネーション・ステート（国民国家）」が、自らの維持、存続、再生産のために、軍隊や刑務所、警察署、税務署、裁判所などと同じく不可欠の装置として、国民全体に義務として課すシビアナ「公教育機関」だからだ。

それに対しての前者は、ある階層・階級の再生産のために、所属する子弟・子女に対し、保護者や、階級の権力機関が課すところの私教育の装置といえる。そのイメージは今日でいうなら、学習塾、進学塾、習いごと所、フリースクール、フリースペース、私立幼稚園などだ。だから歴史的に見れば、後者の近代学校はたかだか二百年であり、前者の私教育のとうとうたる流れに比べれば「例外的」なことなのだ。

なにしろ、私教育の流れは、根源的には人類発祥の頃まで遡り、生命および種属、部族の再生産のために、先行世代（親）が後続世代（子ども）に対して営々となされてきたことなのだから。こっちの方が本流なのに、二百年前（日本では百年ちよつと前）に、突然その隣りに運河やダムを造り、巨大堤防を施し、気づいたら、その人造河の方に水（流れ）を持っていかれてしまった…。

そんなイメージがびったりなのである。かくして、現代人にとっては、教育とは学校中心の公教育を意味し、家庭教育やかつて存在していた共同体社会における「地域的社會教育」は、この学校（的公教育）の従属物におとしめられたか、消滅してしまった。

しかも、この学校は、軍隊や資本制企業、官僚制とも一体化しており、ハンパな人造河川ではない。近代国民国家存立の不可欠の装置として、国民一人ひとりの人生・生活をかためとつてしまうほどパワフルなのだ。

「学びの場」の混乱

ここまで述べてきて、初めて以下のことに合点・納得するのである。

① 朝早くヘルメットをかぶった子どもたちの一団が隊列をつくり通学・登校し、横断歩道にさしかかると保護者らが旗を振りつつ誘導する。

かわいい子どもたちが学びのために嬉々として歩行している、などという牧歌的光景などではなく、実はこれは、資本家階級から見れば近未来の企業戦士の卵の隊列であり、為政者・支配層から見れば、国家を担う国民の形成・養成であり、なおかつ、合理的・効率的・合法的に「選別」していくシステムの一つであり、親・保護者から見れば、わが子太郎や花子が無事に半日を終え、できうれば、勉強やスポーツや他の能力において他のことを凌駕し、成人してからのちのちの長い人生をより有利に、幸せに送っていつでももらいたい。この思い・願いには、二つの異質な「流れ」が同在している。

一つは、国家的公教育に適応馴化することで自分やわが子が人生を送っていくしかない

という合意・和姦・諦念。

もう一つは、しかしながら、わが子を国家にまる投げはしないぞ、太郎や花子それ自体の幸せを願うという、あの私教育を貫く考え方だ。

②不登校、引きこもり、その背景にあるイジメ、管理主義、競争主義、能力主義。荒れ、非行、ぐ犯行為、自殺願望、学級崩壊など、今日つとに指摘されている、いわゆる教育・学校問題や青少年問題。

これら、かなりの数のこどもたちの反乱である学びからの逃走、近代資本制の国民国家的公教育（学校）からの脱走は、本当は何を意味しているのか？

さまざまな「解読ゲーム」がなされてきているが、いずれも正鵠を射たものではなく、したがって実効的な打開・克服の途も提示しえてない。

私の仮説はこうだ。

近代四百年、営々と積み上げ（あるいは壊され）てきたもの、日本では明治以来、ないしは戦後以来半世紀の思想やシステムが根っ子のところから、にっちもさっちもいかなくなってきているのではないのか。

そのことに気づいた者もいて、その固有の観測地点⇨思想的立場から救済提言をしてはきた。ある者は自由教育（よく知られているものとして、モンテッソーリ、シュタイナー、ニール、フレネなどの教育思想・方法。ルソーの『エミール』、ペスタロッチ、デューイなどの進歩主義教育など西欧を中心とした深い流れがあり、日本の私教育にも多大の影響を与えている。キリスト教、仏教とも交差する）の実践から。ある者はマルクス主義的社會主義から。だが、その立場自体こそが、他ならぬ克服すべき近代主義の一つか、それに彩られたものなのだ。

克服すべきは、国家の壁、民族の壁、宗教の壁、近代主義の壁なのだ。この壁を限りなく低くしていつて見えてくる地平こそコスモポリタニズム、インタナショナルイズムという地球規模の公共空間だ。ここはまた、戦争や核兵器や自然環境破壊、資源浪費、科学技術万能主義、競争主義とも訣別する空間でもある。

このような視座こそが不可欠なのに、思想・宗教後進国日本では支配層たちはいったい何を画策しているかといえば、これがまったくお寒い限りなのだ。新自由主義的グローバルイズムはそのままにしておいて、明治以来の悪霊である奇怪なネオナショナリズムを倫理や宗教の代替イデオロギーとして浸透させつつ、この資本制支配体制を乗り切つていこうとしているのである。

新しい「学びの場」

この拙論のタイトルの「闘技場」（アリーナ）とは今日の学校を意味し、ここにおいては公教育を一手に引き受けてきたが、こどもたちの反乱で、その無効性が露わになってきた。こどもたちの逃走、脱走によって地底を流れてきたあの私教育の流れが新たな相貌で地表に届くようになってきた。

この教育の本流である私教育の流れをますます強めていくこと、すなわち、もはや今日の学校を文部省的策略で立て直そうとするのではなく、どんどんと逃走・脱走を促し、学

校それ自体を無化していくこと。そして、ここが肝心要だが、そのことによって、まったく新しい、かつて歴史的に存在しえなかった公共空間を構築していくのだ。この空間の呼称はいろいろあっていい。シチズンシップ（市民精神）が息づく公共性、人民民主主義的公共性、自由と協同の社会主義的公共性……。

これは、国民が国民であることをやめる途、ただの「人間」になることでもある。今日の学校を国家から切り放し、私教育の場にする 것도 あり、そのことを射程に入れないながら、学校の外に無数の私教育の場（そういう意味での自由教育の場）もつくっていく途でもある。

だとすれば、不登校や引きこもり、自殺願望などの只中にいることもたちに「あなたを苦しめている腐った資本制社会や大衆消費社会に対し、共に闘おう」などと不毛な煽動などをするのでなく、「もう学校やお国や親のことなど考えなくていいんだよ、そんなものどうでもいいんだ。さりとて、自分は自己は……と考えつめていくのもナンセンスなんだ、そんなものも幻想なんだよ……」

このようなスタンスは、アノミー（無秩序、混乱）を助長させるアナキーでニヒルな態度だと思われるかも知れないが、そうさせないための居場所（トポス）こそが無数の私教育の場（これには、家庭や地域も含まれる）なのだ。（従来は、いかがわしい宗団や、暴力団、暴走族など犯罪的集団が担ってきた）

このトポスを津々浦々につくっていくことが今や急がれている。と同時に、現有の学校を私教育機関化（トポス化）していくことだ。これはとりもなおさず、現場教師が教育行政権力を相対化し、学校を国家から切り離していくことでもある。むしろ、教員たちだけでできる芸当ではないので、広範囲な自覚的人民・市民の協闘が不可欠ではある。

国家的公で営まれてきた学校が、市民的公につながる私教育の洗礼を受け始め、さながらアリーナの様相を帯びてきている。

二つの公教育の主体（国家とシチズン）の闘技場＝学校におけるデスマッチは、私教育の広がりや深まりによって決着がついていくことだろう。（六津 五郎）

浮島丸事件

― 日朝の「戦後」を考える ―

一九四五年八月二四日夕方、朝鮮人を乗せた浮島丸は舞鶴湾で爆発、沈没した。

青森県で強制労働を強いられた朝鮮人労働者を朝鮮に帰せという旧日本軍の決定により、一九四五年八月二二日、三七三五人の朝鮮人を乗せ、大湊港から出発した浮島丸は釜山をめざして進み、舞鶴港に寄港して、また出港した直後にこの事件が起こった。五二四人が死亡（日本政府発表）。この事件の真相、正しい死亡数など、明らかにされていない。（編集部）

私は、一九四二年の春に、家族みんな、大和高田から岩手県に引っこしました。高田でとなりに住んでいて、いっしょに引っこしたのがテイさんです。今年、六十歳になる長男が入学した年です。

せやけど、夏をこえると岩手は寒くてしゅうとめがぜん息やったこともあって、その年の秋、名古屋の豊田の工場の近くに引っこしました。テイさんの姉さんも名古屋に引っこ

しましたが、テイさん一家は新潟へ引っこしたと思います。うちの家とテイさん一家とは兄弟どうぜんのつきあいでした。

戦争が終わって間なしの秋に、とつぜん、テイさんの親子三人がたずねて来ました。三人とも頭の毛から体じゅう、服も何もかも油だらけでドロドロ、まだ暑い頃やから、着のみのまま、服はそのままかわいてたけど、顔も真っ黒で、とても人間とは思えませんでした。

テイさんたちをのせた船は、青森から出航したそうです。何日もかけての航海で、船よいた人は、ゴロンと舟底に横になつていたそうです。

とつぜん、船内放送で「この船は、あとわずかでばく発する。これからの進路には、機雷がふせつされているけれど、命令だから仕方がない。」という声が流れたそうです。

テイさんは元気やったけど、船によつて、食べ物もあんまり食べられへん人らは、横になつたままやったそうです。テイさん夫婦は、すぐに小学生くらいの娘と、四才の息子の手を引いて、甲板めざして階段を上がつたそうです。元気な人は、みな、われがちに上をめざしました。テイさんたちが上へ上がり切るかどうかの時に、本当に船は、ばく発しました。船底の人たちは、まず、そのまま死んだんやと思います。

上の甲板にいた人は、小舟の救助が間にあつた人は助かり、そうでない人はおぼれていきました。

テイさんは運よく助かつたけれど、家族は死んだものとあきらめていました。

海辺で、ぼうぜんと船の方を見てたらちんぽつして海面から突き出したマストの先に、四才の男の子がしがみついて「アボジーツ、助けてエーツ。」とさけんでいたそうです。

その子は、やがて小舟に助けられました。「お前とお父さんだけになつてしもた。」言うて、親子でしばらくだきおうてたけど、助かつた女の人たちが、海岸で「アイゴーツ、アイゴ―。」言うて、髪をふりみだして泣いていた。「自分の嫁さんとちがうやろか。」と思つて、のぞきこむと、自分の嫁さんやったそうです。

奥さんの話では、二回まで海の中に引きずりこまれて、三回目に近くにういていた行李のひもに指を引っかけて、助けが来るまで待つていたそうです。

私がテイさんたちに「何でそんなにあわてて、むりしてまで国へ帰ろうとしたん。」とたずねました。

テイさんは、戦争中にむりやり引っぱつて来られて日本できつい仕事をさせられたのに、戦争後は日本人以外はクビになつたこと、仕事がないと食べて行けへんと言つと、釜山までの船を出すと言われたこと。この船ならタダで行けるけど、この後、自分のお金で帰国すると、家族もふくめて、かなりのお金がいると思つて、船にのつたことをテイさんは話しました。

その後、テイさんたちは、姉さんの家族もふくめて韓国に引きあげたように聞いています。毎年、ニュースでうき島丸のことをやるたびに、テイさんたちのことを思い出します。テイさんたちは、みんな、だまされたんやと思います。

ほんまに、かわいそうでした。

(姜必善)

労働運動センター

—「〇四年春闘交流会」のご案内—

政治の右傾化は、第二次世界大戦前の「暗いファシズムと戦争の時代」に回帰している。なぜこんなことになったのか、労働組合が「体制維持装置」にすっぽりと組み込まれてしまった。政治を元気にするためには労働組合、労働運動が元気になることが絶対に必要だ。歴史の転換期には労働運動が中心にあり、労働者の闘いが市民、知識人を励まし、民主主義を守りぬくための、あるいは社会主義をめざす政治的統一戦線が形づくられた。

労働運動センターは一昨年、「労働運動再生、私たちが創る労働運動」を目的に旗を上げた。この二年間、どのように学習会、勉強会をやっていくかと論議を重ね、年に一回少しばかり大きな勉強会をもとうよと、「春闘学習交流会」を開く。

テーマは今日の状況を反映してじつに多彩である。閉じこもっていたのでは視野は広がらず、ますます内向きになるだけだ。「社会通信」の読者諸氏も積極的に参加され、明日へのエネルギーをくみとられんことを願ってやみません。

◇日時 二月六日(金)午後一時～二月七日(土)午後十三時

◇場所 全水道会館(ＪＲ水道橋下車徒歩５分)

◇テーマ

【第一日】

年金制度の「構造改革」を批判する 公文昭夫(元総評社会保障局長)

憲法の原点にもどろう―兵庫での総選挙をたたかって 佐治孝典(近代日本思想史研究者)

【第二日】

労働運動再生をめざす―フロアからの発言

アメリカ労働運動ニューボイスから学ぶ 戸塚秀夫(アメリカ労働運動研究者)

◇参加費 三千元(全講座参加者) 二千元(一日参加者)

◇連絡先 東京都千代田区岩本町二一七―四

TEL〇三―五八二〇―一〇〇七 FAX〇三―五八二〇―二〇八〇

障害者を中心に手作りフォーラムを開催

—「障害者の就労・自立」を目指して—

一年前からフォーラム開催準備

「障害者への究極の社会保障は、働く意志と能力のある全ての人の就労・自立である」をキーワードに活動しているわたし達の会は、去る一月三〇日(日)、構浜市内で「障害者の就労・自立―デンマークと日本」を開催し、多くの成果を上げることができました。このフォーラムは、会が三年計画で取り組んできた講座「障害者の現在(きょう)・過去(きのう)・未来(あす)」の最終年度にあたり、過去三年間二二コマ、二〇講座の学習の成果を発表する場として、メインコメンテーターをデンマークからお招きし、準備は一年前から進めてきたものです。

当初、資金は行政からの助成が可能との話でしたが、昨年二月になって、財政難を理由に、市の助成が見込めないことになり、一時は中止を考えたものの、一昨年十一月に依頼していたデンマークのメインコメンテーターの予定を変更できないことと、仲間の熱心な

議論を踏まえて、開催することを決定しました。

障害者を中心に手作りのフォーラム開催へ 決定してから、実行委員会の大きな課題は、資金作りと人集めが大きな課題となりました。資金はフォーラムのプログラムをやることで資金を確保することとし、出席を予定しているコメントーターの方々の紹介と、取り組んでいらつしやる仕事や活動を資料で紹介することで第一部を構成し、第二部は、講座「障害者の現在・過去・未来」の過去三年間二二コマ、二〇講座の学習の内容を紹介することにしました。そして、開催時点で障害者の抱える問題が一目で分かる関連資料集を作り、二点セットでカンパをお願いする資金作りに取り組みました。結果、充実した内容に納得した人びとに、激励のことばをそえてご協力して戴くことができました。こうして資金作りはどうか目標額を達成し、実行委員の自信へとつながりました。

次は人集めです。まず、市内の公的施設を中心にチラシを配付し、行政の広報紙をはじめ、新聞・テレビ・ラジオなどのマスコミのタウン情報への働きかけを展開しました。結果、チラシは昨年六月頃から開催までに合計三千枚を配付し、行政の広報紙で取り上げられたのをはじめ、大新聞二社と地元ケーブルテレビ局で事前案内が実現しました。ここまですむと次は実行委員の口コミによる人集めです。この段階で障害者とサポーターの実行委員はさらに自信を持ち、チラシを手友人・知人への口コミを展開しました。結果、用意した座席は満員とすることができました。

開催日当日、助っ人に地域の学生と若者、そして、このフォーラムを聞きおよんだ市民が名古屋からも駆けつけ、成功させたいと願うその熱気は、実行委員全員の手作りフォーラムを盛り上げる力となりました。

多くの成果は皆の力の結集だ このフォーラムはデンマークの人権に基づいた障害者の就労・自立の歴史的経験と、日本の障害者の就労・自立の現状と課題を明確に描きだし、充実した内容は出席したコメントーターと参加者にご好評戴いたことを筆頭に、障害者自身がフォーラムを成功させようと、電動車椅子を走らせ、聴覚障害者は手話通訳者を伴ってマスコミ行脚に取り組み、働いている障害者は職場の仲間にチラシを渡しながら参加者を募り、サポーターの仲間は障害者の活動をしっかりと支え、脇を固めました。

こうした取り組みが、手作りフォーラムの成功の秘訣だったと思います。

地域ユニオン運動などと連携して わたし達の会の活動は、この他に在宅重度障害者の介護と支援費問題などのほか、就労している障害者の問題や就労を望んでいる障害者の相談などにも取り組んでいます。そのどれもが障害者本人にとっては生存に係わる大きな問題であり、一瞬たりとも、気を緩めることはできません。問題によっては、行政や企業との交渉を必要とします。

わたし達の会だけで解決できない問題は、他の障害者団体などの力も借りて解決にあたることにしています。特に障害者の就労問題に関しては、神奈川ワーカーズユニオンと共

に取り組み、問題の解決にあたっています。

今後の課題と行政の姿勢の変化 今後わたし達の活動は、いままでの経験を生かして、さらに発展を目指していますが、ここに来て行政の姿勢に大きな変化が出てきました。それは、講座を生涯学級として支援してきた行政が、行革と財政難を理由に、事業の見直しを打ち出し、年間十萬円の財政支援を打ち切る方針を明確にしました。のみならず、会場費の無料確保や手話通訳者の謝金の支払い中止と、会の活動そのものを直撃してきました。

わたし達の会は、聴覚障害の仲間がおり、一緒に活動する仲間として情報の共有や、情報の確保は必要です。従って、講座などでの手話通訳者の確保は、欠かすことはできません。聴覚障害者の生存を保障すべき行政として、聴覚障害者への情報保障は当然の責務です。しかし、この支援の打ち切り見直しは、聴覚障害者の生存権を否定するものであることを、近く開催が予定されている行政との交渉で、明確に訴えるつもりです。

バリアフリーが障害者と社会の可能性を拓く 冒頭で、「障害者への究極の社会保障は、働く意志と能力のある全ての人の就労・自立である」と述べましたが、それは次の四つのバリアフリーが大きな意味を持っているからです。

まず第一に、建造物のバリアフリーです。公的施設のスロープ化で階段がなくなり、リフトバスの走行、駅などではエレベーターやエスカレーターが設置され、車椅子での移動が随分便利になりました。第二に、文化面のバリアフリーとして、各種の表示技術や音声案内が進歩し、聴覚障害者や視覚障害者の外出が容易になりました。また、手話ニュースは、聴覚障害者が社会のできごとを知るツールとなり、さらに、テレビのデジタル放送は、障害者が情報獲得する便利なツールになると考えられます。第三に、制度のバリアフリーとして、聴覚障害者の薬剤師、視覚障害者の医者など、以前には考えられなかった職業での欠格条項の撤廃は、障害者の職業領域をさらに拡大する大きな可能性を持っています。

最後のバリアフリーは、一番危介で、勇気と優しさを持つ一番簡単な心の問題です。障害者を個性として捉え、それを認め、尊重する心を持つ優しさと勇気を持つことが、新たな人間関係と成熟した社会を作ることができると思います。

これら四つのバリアフリーに社会の構成員である一人ひとりが真剣に取り組めば、柔軟で豊かな社会を作り、障害者の社会参加を早期に実現することができると思います。

障害者自立支援法の制定 差別禁止条項のない障害者基本法が制定されましたが、これではさび抜きの寿司と何ら変わりはありません。障害者差別禁止法の制定運動が、さまざまな団体で進められていますが、差別を禁止しただけでは意味がありません。

大事なことは、人権尊重に基づき一人ひとりにあった障害者の就労・自立を社会的に支える「障害者自立支援法」の制定であると思います。先天障害を例に言えば、この法律では、生まれて育つ過程での療育や機能訓練と生活動作の取得のサポート、学齢児の学習や職業訓練、社会生活の訓練などのサポート、就労後は職場定着と日常生活のサポート、老

後は生活サポートと、障害者が安心して生きていける生涯にわたる公的支援を法的に確立する必要があると思います。

わたし達の活動は小さいけれど、「障害者への究極の社会保障は、働く意志と能力のある全ての人の就労・自立」が保障される障害者自立支援法の制定を目指し、さらに、活動を続けていきます。(神奈川・障害者の社会参加を進める会事務局 太田 耕造)

◇ 読者からのおたより ◇

足を地に 厳しい時代です。足を地につけてがんばります。(埼玉・T)

編集部より NHKテレビでの「大地の子」、久しぶりに感動したテレビ映画でした。「大地」にしっかりと根をはやし、労働運動再建を。それなしには政治改革は不可能。

残りはカンパ 残金は少々ですがカンパ。

(東京・S)

編集部より 感謝。この他にもカンパいただいています。国鉄闘争団におわたしします。首切りだ！ 出向・配転は首切りだー！ 三年目に入りました！ 今年の十二月一日には、JRへ

かならずもどしてもらおうぞ！ 約束は守らせるぞ！

(H)

編集部より 「約束はかならず守らせる」。労働運動の原点です！ 鬼 たいへんな世の中になってきました。自衛隊員は金がかかりすぎる。次は国家総動員だ。小泉の顔が鬼に見えてきました。

(京都・T)

編集部より おっしゃるとおり。小泉は鬼。国民を飲んでかかっているからです。新自由主義に闘う戦線 ○四年は新自由主義と闘う戦線を構築する年。兵庫からもできるだけ問題提起し、実践したい。(神戸・S)

編集部より 兵庫は機関車。具体的な方策と実践の提起よろしく！

小泉打倒 イラクへの自衛隊派遣、許し難い年金への課税強化等、自公政権は国民に多くの痛みを押しつける最悪の政権。打倒めざしてがんばろう。(北海道・N)

編集部より 現代の政治状況は総保守がつくり出したもの。小泉はその道具。

絶対反対！ 小泉よ、憲法前文を手前勝手に解釈するな！イラクに自衛隊派遣、絶対反対！(北海道・I)

編集部より やがてイラク派遣の自衛隊に、なんらかの出来事がおきるでしょう。小泉も自民党

もそれを逆手に、さらに軍備増強を考えているだろうことは明らかです。

雪の中の事務所開き 十二月二〇日、金管五重奏バンド「ゾルバンガ」の軽やかな演奏の中、四月の福山(広島)市議会議員選挙に初挑戦する西本章後援会の事務所開きが開かれました。小雪のちらつく中、多数の方が参加。西本さんは「地域の子どもたちを地域で育てることの大切さを感じます。絶望の政治から希望の政治へ、夢を語る政治を一步ずつ進めていきたい」と力強く抱負を述べられました。(福山・西本後援会)

編集部より 西本さんは私の友人。メッセージをお送りしました。

戦後のやり直し われわれの「地域ユニオン運動」は、現在進行形であり、歴史という過去形ではありません。いずれ、あと数十年後には、労働運動史の史家が「21世紀日本における、地域ユニオンの存在意義」として評価してくれるかもしれません。それにしても、既成の、とくに大労組はどうなっちゃったのでしょうか。私は、労働運動の低迷ばかりでなく、学校教育、マスメディア(のジャーナリズム精神の退廃)、政党や社会運動のバラバラ化、タコ壺化、司法の反動化などを根源的・原理的に考えていって、「根っ子の腐りは同じ！」との着想を得ました。なんのことはない。戦後(民主主義)のやり直し、近代二〇〇年の選び直し、だったのだ。こうして、明治維新と地域ユニオンは内的にリンクしていくのですね。(茨城・M)

編集部より 歴史は私も大好き人間。大きな視野が必要な時ですね。

八八八号 「八八八号、末広がり」に発展するのか、パーと消えるか。上下、前後、左右、苦楽、人生も社会も総て両面あり。末広がりに発展するとき、社会はますます暗く重くなる。社会通信がパーッと消え去る時は、社会が通信を必要としない平和な明るい社会になった時と、強烈に願望する。(神奈川・K)

編集部より 嬉しいお便りに感謝。とりあえず三十年を目途にがんばる。